



TITLE:

星の愛好者ダンテとトレミーの天動説

AUTHOR(S):

川合, 義夫

CITATION:

川合, 義夫. 星の愛好者ダンテとトレミーの天動説. 天界 1933, 13(145): 183-185

ISSUE DATE:

1933-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162348>

RIGHT:

星の愛好者ダンテミトレミ | の天動説

川 合 義 夫

ダンテ神曲を読む者は、誰人と雖も、彼ダンテが天文學者としての造詣深きに驚かされるであらう。

實にダンテは、神の造化の妙の極致とも云ふ可き天體の美に、驚異の眼を睜^{みは}りしと共に、その美に跪き、泣き、祈りし人であつた。身に恐懼^{おそれ}をもよほして、戰慄^{おのゝ}き、骨節^{ほねふし}ごとごとく振ふが如き、凄然たる地獄を経、繪畫的淨火山を辿り、愛の歌の満ち溢れる天國に迄、彼が登攀^{さうはん}せしは何の爲であつたか。たゞ諸^{もろもろ}の星を凝視して、その星々よりさしくる圓滿なる光に、心行く迄、身を浸^{ひた}せる爲ではなかつたらうか。地獄を巡禮せしも星を愛する爲、淨火山に攀^よぢ登りしも星を愛する爲、天國に翔^かけ昇りしも星を愛する爲^{ため}であつた。

夫故、地獄篇の最後の句が、

しかくて この處をいでぬ、再び諸々の星をみんとて^{もろもろ}」

にて終り、

淨火篇は、

「清くして諸の星にいたるに適はしかりき」

にて結ばれ、

「はや愛に廻^{めぐ}らさる。日やそのほかのすべての星を動す愛に」

で天國篇が終結してゐるのも、星の愛好者としてのダンテに 適はしき事である。

ダンテは星に、天文學に精通せしとはいへ、彼は決して専門の天文學者ではなかつた。寧ろ^{むしろ}彼の本職は政治家である。政治家ではあつたが、彼は書物の容易に得られ難き中世に於いて、ブルニの傳ふるが如く、繼母の膝下にて七學即ち、文法・辨證學・修辭學・算數・幾何學・音樂・天文を修め、且又、物理學・論理學・神學を、専心研究し、有爲の人物となるためには、あらゆるものを研究したといはれてゐる。實に彼の學究的精神の盛んなりしことは、驚嘆に値する。

彼の天文学の知識は、當時の説として、トレミの天動説に據つてゐる。現代のコペルニクスの地動説より見れば、随分幼稚だが、中世紀の産物としてのダンテを見るならば、實に天文界の巨匠たるに恥ぢない。ダンテが専門の天文学者ならずして、たゞ素人の天文学者として、單に趣味と憧憬の眼を向けたことは、我々星同好の者にとつて意を強ふするに足りるのである。

星の愛好者としてのダンテを、眞に知る爲には、ダンテの宇宙觀、トレミの天動説を少し述べて見なければならぬ。

天地創造の時の神の御言葉、

「天の穹蒼おほぞらに光明ひかりありて、晝と夜とをわかち、又天象しるしのため時節ときのため日のため年のために成るべし。又天の穹蒼にありて、地を照す光となるべし。」

及び、

基督の聖言として、

「天地うせは廢ん、されど我言ことばは廢じ」

等の天地創造に關する聖言又使徒たちの信じた世紀末的思想は、中世紀に於ては、紀元前三世紀にギリシャの天文学者間に起りし古代天文学と少しも接觸する處を見ない。この古代天文学は、主として紀元二世紀アレキサンドリヤのトレミ（プトレマイオス）によりて組織化され、且又スペインのササン朝時代に於いて、アラビヤの天文学者達によりて、詳細に研究された。トレミは前述の如く地球中心の天動説てんどうせつを採り、地球が宇宙の中心を占めてゐることを信じてゐた。この説は、十六世紀に下りてもゆるぎ無き確信であつた。

詩的情緒ちよのこまやかなりしダンテは、トマス・アクィナスの神學説を詩の美装みそうもて纏まとひしと共に、又このトレミの天動説を、詩の國に於いて、美化した。

さて宇宙の中心は地球であり、地球は宇宙の最低の場所を占め、重き物體より成り、空氣に包まれ、その上を又火にて包まれてゐる。火天は上昇する焰あこがが燦きら々たる眞の場所である。火天を越へて、七遊星があり、各々天を有し、月天は最低にかぞへらる。日天は中位にあつて、遊星の一つとされ、全宇宙の光源にして、恒星はすべて日より光をうける。又地球遊星も彼より光をうける。

ダンテは日を形容して、

「自然の最大なる僕にて、天の力を世界に^お捺し、且つ己が光をもてわれらのために時を量るもの」といつてゐる。

又この日天に於いて、いと美しき節がある。

ベアトリ | チェ曰ふ。

「感謝せよ、恩恵によりて汝を^{めぐる}擧げつゝこの見ゆべき日にいたらしめし^あ諸々の天使の日に感謝せよ。」人の心如何に畏敬の念に傾き、またいかに喜び進みて己を神に捧げんとするも、これらの詞を聞ける時のわがさまに及ばじ。わが愛ことごとく神に注がれ、ベアトリ | チェはそがために少時忘れき」

1781年迄は、最遠距離と考へられてゐた土星天を越へて恒星天がある。トレミーは恒星を1022個數へた。現代の吾人が肉眼で見得る星の數の僅か四分の一に過ぎない。又現代の星圖に記載してある星數の百分の一にも足りない。アリスト | トルはこの八天の外には何も知り得なかつた。此等の各天は己自身の西から東へめぐる運動を有し、宇宙の中心なる地球からの距離が増すに従ひ、この運動は徐々となる。夫故恒星天は三萬六千年に僅か一度しか回轉しない。

乍併、遊星の軌道は、この考へからは充分に解し得なかつた。その結果遊星にも夫自身見えざる點の周圍を回轉することを許した。これが回轉圓といはれる。しかし^{これだけ}之では日月星の昇り又入るのが解されなかつた。そこでトレミーは八天の外に、^{すべて}全て他の天を抱き、又彼等を包み、あらゆる運動の源泉、あらゆる變化の因なる第九番目の天を以つて説明した。この九番目の天は^{モデル}原動天と呼ばれる。又原動天の外に^{モデル}光明天をおいた。光明天は神の永恒不變なる平和のある所である。

ダンテは光明天を讚美して云ふ。

「われらは、最大なる體を出でて、純なる光の天に來れり。この光は智の光にて愛之に満ち、この愛は眞の幸の愛にして、悦び之に満ち、この悦一切の樂にまさる」と。

この光明天は水晶體にて、透明、眼にて見る事が出来ない。即ち、

「宇宙の諸天をことごとく^{みいき}蔽ひ、神の聖息と法とをうけて熱いと強く生氣いと^{のり}旺んなる^{さか}王衣^{わうのころも}はその内面われらを遠く上方に離れるたためわが居りし處にては、その^{さま}状態だ我に見えねば………」

世には詩人は頗る多い、されどダンテ程よく光に對して感受性の強い詩人はなからう。ダンテにとつては神は先づ光であり、生命であり、眞理であつた。

ダンテは光に合掌して跪きしと共に、光の中に透徹した人である。彼は光と共に生き、死すと共に光の國に飛翔したのである。最後迄「光を欲す」と叫んだゲ | テとその差異は實に甚だしいではないか。